

国立ハンセン病資料館の講師による講義への感想を書いてください。（匿名にして感想内容部分のみ講師にフィードバックします。）

私は今までハンセン病については名前を聞いたことあるくらいの認識であったが、ハンセン病とはどのような原因によってひきおこされるのか、どのような症状が弾き起こるのかを知ることができた。また、ハンセン病自体は遺伝性のもではないにも関わらず、長い間、差別や偏見の対象になっていたことに驚きだった。現代は治療法が解明されていると言うことで、安心した。

ハンセン病という病気は今までも何回か聞いたことはあるが、今回詳しく聞くことができてよかった。癩予防法に基づき無癩県予防で県ごとに競わせたという隔離を国全体で助長することにつながるためよくない政策であると思った。コロナウイルスもハンセン病ほど差別はひどくはなかったように思われるが、世界中でアジア人が差別されたり追い出されたりしたり、病院にいる人と家族は会うことができなかったり、少し似たような環境ではあったのかもしれないと思った。症状の軽い半宣命患者が重い症状の患者を世話したり、逃げ出した人を監禁室に入れたりするなど、人権を無視したような行為をしていた事実非常に驚いた。違憲だと認められても患者やその家族の心の傷は一生消えないものだった。化学療法が確立した後も強制隔離が続いていたというのはあってはならないことであると思ふし、国としてこの患者たちが社会的に生活していけるように政策を考えるべきなのに考えてくれなかったというのは責任重大だと思った。ホテルの事件でも後遺症などによって見た目で見分断されて拒否されるというのは今考えるより非常に非人道的であるしあってはならないことであると思った。誹謗中傷など、今もずっとなくならないものもあるけれど、これらは改善していくべきであり、基本的人権はどんな人でも保障されるべきだと思う。

今回の講義は、ハンセン病についての話を聞くこととなった。まず最初に丁寧にハンセン病について説明された時、しっかりと正しい情報を繰り返し聞くことが大事なのだった。症状は中々見るのが辛いものであったが、患者はこれをずっと見ていたのだと気づいた時、唖然とした。昔からあった病気であったのは初めて聞いたが、それでも治療法が見つからなかったのは医療が発展していなかったのか、宗教により「治療なんてできるはずがない」という偏見による忌避の結果なのか、私は訝しんだ。また、日本のトップである政府がハンセン病患者に対し、隠せば根絶したと同義と言うような子供みたくな運動を行ったことが日本国民として恥ずかしくなった。その中で、ハンセン病患者が国に負けず療養所を出ようと自分たちの人権と自由を求めて戦う姿には考えさせられるものがあった。現在、療養所が普通の街のように扱われ、祭りが行われているのを聞いた時には、呪われた土地として閉じられた場所にならなくて良かったと思った。正しい知識で自由と幸せを保ち続けていきたい。

本日はお忙しい中、ハンセン病に関する講義の時間を設けていただきありがとうございました。ハンセン病の歴史およびこれからについて、深く考えるきっかけになりました。

ハンセン病は決してけがれた病や遺伝による病ではないということは前提知識として身に付けていたが、治療すれば治るという点においては知識不足でした。専用の薬を飲めば治るにもかかわらず、当事者たちはその誤解を晴らすことをできず、隔離生活を強いられるしまったという話は酷く理不尽だと思いました。そのような国家ぐるみでの人権侵害が現在に至るまでに風化されることなく、有罪判決という形で歴史に刻まれた点は、私まで報われた気持ちになりました。

しかし、浅学で恐縮ですが、少し前の新型コロナウイルスの蔓延時も、ハンセン病が流行した当時と同じような状況だったのではないかと思います。詳細不明の病気（ウイルス）の感染拡大を防止するために、感染者は否応なしに自宅や病院に隔離され、一時的に身体的・社会的自由が奪われました。そのような処遇に対し、当時の私は「社会の秩序や経済を維持するためには仕方がない。同じ立場になったら私も率先して閉じ籠らるだろう」と考えていました。今思えば、リアルタイムで国家による人権侵害に加担していたような気がします。同じことを繰り返さないために、ハンセン病患者が受けた差別被害をはじめとした、様々な社会的排除を風化させない取り組みを活性化させる必要があります。一方で、今の私たちはイレギュラーな出来事が起きたときに冷静さを欠いてしまい、判断を誤ってしまうことが証明されました。初めから正解を出すことは難しいとしても、当事者やその関係者の声にしっかりと耳を傾け、対等な立場で解決に向けた取り組みを検討していくことが大切だと気付くことが大切だと考えることができました。これからは未知のものをただ恐れるのではなく、問題の当事者と共に議論し、社会全体に偏見や固定観念が蔓延する前に行動を起こすようにしたいと思ひます。

患者が療養所に隔離されて、75年前プロミンができたことによって化学療法ができるようになったのにも関わらず、「差別が残っているから」と50年もの間強制隔離が続けられたのは、差別を無くす努力をしないで隔離をするといった政策をとったのはとても許し難いことだと思いました。病気も障害と同様に、広める・実践する人が現れなければ病気や障害を持った人には自由と幸せ、健康者と共に歩める社会が実現できないことを改めて実感しました。また、国立療養所を上から見ると、木で囲われており、違和感なく完全に隔離するという工夫がみることができました。そういった面からもその時代にとってのハンセン病は隠さなければならぬものだったのかなと捉えることもできました。桜井哲夫さんの妻が中絶されたお話やハンセン病療養所入所者ホテル宿泊拒否事件があったことを聞いて、とても悲しい気持ちになりました。回復者の方達のお話を聴いて、病気にかかる恐れから排除の気持ちが芽生え、感染者を攻撃したり人権を侵害することは絶対にしてはいけないことだと思いました。

小学生の時から現在に至るまでハンセン病について沢山の講義を受けてきました。それでも、毎回違う気付きがあると思ひました。知っているつもりでもまだまだ知らない苦しさがあるのだと痛感した。隔離されて、人権を奪われていた事実はほんとに悲しいです。ハンセン病の安全性を知ったにも関わらず、偏見が直ぐに消えず、政府もすぐに動かずというグダグダとした対応により多くの人が人権を奪われた状態で亡くなったということを知りました。ただこの講義で知るだけではなく、アクションを起こせるようにしたいと思ひました。現在でも新型コロナなどサル痘など様々な新しいウイルスに私たちは直面しています。その時に、私は偏見を持たずに正しい判断が行えるような人になりたいと思ひました。100分の講義ありがとうございました。

東日本大震災のとき、きちんと検査されたものしか売り出されないのに、風評被害で野菜で福島産が敬遠されたりしたのと似ていて、偏見というのはとても難しい問題だと思ひました。自分が偏見をもったときは、それを認めて、その上で違う見方ができるようになれるとよいと思ひました。

今回の授業でハンセン病患者の歴史や、課題について学ぶことができた。何もかも国を信じるべきではないということもわかった。高校生の頃にハンセン病の問題は習っていたが今の現状は知らなかったので知ることができてよかった。今は日本ではハンセン病患者は減っているが、水などの設備が整っていない国はまだ患者は少ない。この問題を解決するのは難しいかもしれない。しかし、差別をなくすために私たちが心がけるべきことを学ぶことができた。一人一人が問題を正しく理解することが大事ということを知った。間違った法律もあるということを知ることが大切である。今の私たちにできることは同じ過ちを繰り返さないことである。人はみんな差別意識を持つてゐる。自分と違うものは怖くなり排除しようとする。私も差別するかもしれない。しかし、相手の気持ちを考え行動するようにしたい。

ハンセン病について考えたことが今までになかったため、今回は考える良い機会になりました。ハンセン病は感染症だと知って途端にハンセン病患者を恐れてしまう気持ちもわかる。人権侵害はよりされやすいのではないかと考えます。療養所でも療養する場ではなく、社会から隔離させるための場所としてあり、大きな人権侵害が行なわれていると思ひます。また、療養所では子供を産むことの禁止や、強制労働などがあるととても驚きました。差別をなくすためには正しい知識を社会に伝えることや、病気にならないような衛生問題の上昇などを進めていく必要があると考えます。そして、感染者には治療するだけでなく心のケアや、感染者を守るための法律をしっかりと取っていくべきだと考えます。

先ずは本日、お話に来て下さりありがとうございました。ハンセン病資料館が清瀬駅にあることはかねてから知っており、いつかの機会に行きたいと思ひていたので本日のお話はとても良い機会となりました。

どれだけ意識を変えようとしても、程度の差はあれ少なからず差別意識を持つてしまうのが(多くの)人間だということに改めて気付かされました。それを鑑みても「差別をなくそう」という考えはとても難しいものだと思ひます。嘗てとても恐れられていた黒死病や結核は、時が経ち、今や化学療法などで完治するようになり、不治の病ではなくなりました。私達はそれらの病を「しっかりと治る脅威的では無いもの」と定義する時代に生まれ育ったのでこれらの病を特段怖くは思ひませんし、偏見や差別も特段抱いていません。かと言って、時が全てを解決するという訳ではありません。まだまだ差別や偏見が残っているからこそ、私たち世代の一人一人がハンセン病について正しい知識を得て、必要時には伝達し、今世代、ひいては次世代には差別が泡がはじけるのだからと消えて無くなっているようにしていき必要性があると感じさせられました。

私はこれまで何回かハンセン病についての講義を受けてきた。福祉の先生だけでなく、実際にハンセン病を経験した方のお話も聞いたことがある。今回のお話で印象に残ったことは「人権侵害」についてである。ハンセン病は手足や顔が変形してしまうことがあると今回学んだ。ハンセン病の対策を国が間違っていたためたくさんの方が偏見差別による人権侵害問題を受けていたことがとても悲しく感じた。人権侵害問題の中でも患者家族の方が仕事をクビにされていたことが特に残酷に感じた。

私自身もそうであるが、ハンセン病について理解のある人というのは少ないように感じる。より多くの人がハンセン病についての理解を深めることで、差別問題などが改善し、誰もが生きやすい社会が実現するのではないだろうか考える。

本日はお忙しい中ありがとうございました。

<p>日本におけるハンセン病の患者というのは、つらい迫害などを受けていたということが分かった。感染してしまった人の居場所ができず、人権侵害のようなことも行われてしまっていた現実があったのはとても驚いた。体の一部が変形してしまう外観の特徴などから、偏見や差別の象徴にされていることに加え、療養所に強制的に収容していたことも、このような迫害を助長してしまっていたのだと理解できた。</p> <p>ハンセン病の差別があったとは知っていたが詳しい内容は知らなかったので今回知れてよかった。コロナというパンデミックを経験していたので今回の話を近いものとして受け止められた。コロナが流行り始めた頃、出かけた先でコロナに感染した人が地元で帰ってくるなど差別を受けてしまったことを思い出した。この差別が根強く、また正しい情報を伝えられなかった結果がこのハンセン病の人権侵害のようになってしまったかも知れないと思うと背筋が凍った。</p> <p>これからこのような差別が起きないように、全員が平等に生きられる世の中にするには何が必要なのか学びそして考えていきたいと思う。</p>
<p>ハンセン病の強制収容はドキュメンタリー番組などで見たことがあり、ハンセン病患者がどのような扱いを受けていたのか少し知っていましたが、私自身、ハンセン病患者に対して差別的な感情は全くないので、戦後すぐに終わった問題だと思っていました。</p> <p>しかし、らい予防法が廃止されたのが1996年(平成8年)、平成の出来事だということを知って、そんなに最近の出来事だったのかと衝撃を受けました。</p> <p>新型コロナウイルスも、感染者0人だった岩手県で初めて感染者が出た時に、ネット上で個人情報の特定や、その方の職場や家族に誹謗中傷が行われたりしましたが、まさに当時のハンセン病に対する社会の扱いと同じだったのではないかと思います。このように考えると「ハンセン病問題」という概念は現代にも共通するものがあるのだと思いました。</p> <p>もしも、また未知の感染症が流行した時、社会はどのように対処すべきかをハンセン病、新型コロナウイルスから学び、決して、同じ過ちを犯さないようにするべきだと考えます。</p>
<p>ハンセン病という言葉自体は知っていましたが、具体的にどのような病気なのかを知らませんでした。ハンセン病について学んだことで最も驚いたことは、ハンセン病は薬で治せるということです。ハンセン病は一度罹ったら二度と治らない病であると思っていたので、誤った認識を直すことができよかったです。しかし、国は法律によってハンセン病の誤った認識を国民に与えて、国民にハンセン病患者への差別思想を植え付けていたこととはとても悲しいことだと思いました。そしてその差別思想を持った人々によるハンセン病患者のホテル入居の拒否の事件は本当に良くないことだと思います。講師の方がおっしゃっていたように、たしかに人は本能として差別意識を持っています。しかし、同時にそれを抑える理性も持っています。ハンセン病についての正しい知識を学ぶとともに、ハンセン病に対する差別意識をなくし、ハンセン病の方が生きやすい世の中をつくらせていくことが最も大切なことだと思いました。</p>
<p>今回の講義で、ハンセン病の歴史や過去の事柄について学びを深めることが出来ました。ハンセン病は患者だけではなく、その周辺の人々にも大きな影響を及ぼす重大な人権侵害問題であったことが分かりました。ハンセン病にかかっただけで結婚を拒否されたり、無頼県運動と称して各県で競わせて、学校や会社などの社会環境から急に遮断されたりすることはとても悲しく、理不尽なことだと思いました。しかしそ彼らの立場になって考えると、理解が不十分な病気や感染症にかかってしまっている人が身近にいたら、避けてしまったり自分を守るための行動をしてしまうことは仕方がないことなのではないかとも思いました。新型コロナウイルスが流行した時も、人々は患者に対して薄情な目で見たり避けたりしていたことがそのいい例だとします。私たちは、病気や感染症になってしまった人々の気持ちを考え、お互いに気遣って思いやる行動をしていくことが大切だと感じました。</p>
<p>これまでハンセン病について名前しか知らなかったけど、今日の講義を聞いてハンセン病は病気そのものに苦しむだけではなく、法律によって人権が侵害され精神面でも患者やその家族が苦しんでいたことを学びました。療養所という名前なのにすごく劣悪な環境の中での生活を強いられていた、病者なのに仕事をさせられたり、監禁室があったりと一度入ったら出られない所にごく恐怖を感じたし、偏見の恐ろしさを当時の状況から理解しました。また、無らい県運動では各県で競わせたハンセン病にかかった人々を隔離したり、最近では2003年にはハンセン病にかかったことのある人のホテル宿泊を拒否したり、匿名で療養所の入所者に誹謗中傷のメールを送ったりと昔も今も偏見や人権侵害、差別がなくならないことに気づきました。差別を受けた本人がつらいのはもちろんですが、その家族が不当な待遇や差別を受けていることを知って、もっと世の中の人にハンセン病についての正しい情報を流して知ってもらうことが重要だと感じました。</p>
<p>今回の授業を聞いて初めてハンセン病という病気について知ることができた。ハンセン病は感染症の一種である。ハンセン病問題とは、その病気が治らない病気であることなどではない。ハンセン病問題とは、患者とその家族が受けた偏見差別による人権問題のことである。現在では治療薬が開発されており入院しなくても治療することができる病気であるにもかかわらず、人々がハンセン病患者に対し偏見を押し付け、人権を侵害するような対応をしたことに胸が苦しくなった。この偏見は国が制定したハンセン病に対する法律によって生まれたものだと聞いて驚いた。国からの間違った認識が広まったのも驚いたが、その誤りに周りの人が疑問を持たず差別を続けてしまったことにも衝撃を受けた。このような差別はハンセン病に限った話ではないと感じた。私は今回のお話を通して、現代に多く存在する常識は差別や偏見により歪められている可能性があると考えた。これからは、自分が思う常識や当たり前なことが本当に正しいものかを考えながら生きていきたいと考える。</p>
<p>私は本日の授業でハンセン病について深く知ることができました。特に印象に残っていることは3つあります。</p> <p>1つ目はハンセン病は未だ全てが判明している病気ではないということです。今までハンセン病という病気があることは耳にしたことがありますが、実際どんな症状で人々が苦しんでいるのかを知ることができました。</p> <p>2つ目は患者の生活環境についてです。患者同士が助け合い、家事や掃除を行ったり、面倒を見合ったりしていたことに驚きました。患者の回復を真実座すのではなく、閉じ込めることが目的となっていることに衝撃を受けました。人間をして生きる権利を失った人々は社会から隔離されていることを知りました。また社会復帰を目指し、デモを通して発信し続けていたことも知りました。法律を制定するまでには様々な人々の取り組みがあって今の制度が作られていることから声を上げ続け、戦わなければ社会は変わらないのだと感じました。今でも様々な困難を抱える人々がいます。その人々の声に耳を傾け、自分ごととして問題を考えていきたいです。</p> <p>3つ目は50年間もの間改善されなかった理由は厚生行政が療養所の処遇改善のためには法律を継続する必要があると考えられていたためであることを知りました。共に歩める社会を目指すことでハンセン病を患っているか否かに関わらず平等な存在として共に生きることが大切であつと感じました。基本的な人権が尊重されるために私たちができることを考えていきたいです。まず始めにハンセン病についての正しい知識を知り、周りに伝えていきたいと思えます。また差別しないために相手の気持ちを尊重し、他者の価値観を理解することに力を入れていきたいです。</p>
<p>本日は貴重なお話ありがとうございました。私自身、ハンセン病は聞いたことがある程度であり理解しておりませんでした。本日の講義では、ハンセン病についてはもちろん、歴史や過ちについてもお話していただいたのでとても理解することができました。その中でも特に、治療法が出現したにもかかわらず、継続して強制隔離を行っていた事実が印象的でした。治療法が出現しても、隔離中の方がすぐに社会に出ることが難しいということも踏まえて継続されていたと知り、社会問題の複雑性を改めて感じました。今後同じ過ちを繰り返さないためにも私たちひとりひとりの理解が重要だと考えました。</p>
<p>私は、小学生の頃にハンセン病について学んだことがありました。その時は私の地元香川県「大島青松園」に、ハンセン病患者が生活する施設があったということもあり学ぶ機会がありました。今は先生も言うように薬を飲めば半年程度で治りますが、昔は伝染病と恐れられ、ハンセン病患者は隔離するなど、とてもひどいことを行っていたと知り、悲しい気持ちになります。患者同士が看護・介護を行なっていることは初めて知り、本当に驚きました。軽患者が重患者の面倒を見ることは、今では考えられることではありませんが本当にゾッとします。しかし、完全に法律が変わったのは最近だったこと、それを語り継いでいける人が後期高齢者になってしまっていること、このような課題に対して、現代を生きている私たちは何をすべきなのかしっかり考えなければいけないと思います。治療薬ができてこのように長い間、施設から出ることが出来なかったのは、社会全体から差別の目が消えなかったからだと思います。一度植え付けられた考え方は簡単に消えることはありません。だからこそ、現代でも差別と偏見は無くならないのだと考えます。一人一人が自分の言葉や意識を考えることで、これから先変わっていくのではないのでしょうか。</p>
<p>私はハンセン病という名前自体は知っていましたが、その症状や患者への差別があったことは知りませんでした。もし、この病気について、感染力が高く穢れた病気だと説明されたら信じてしまうかもしれません。実際に昔の人々は、穢れた病だという誤った固定観念を持ち続け差別をやめなかったというお話でした。特にハンセン病患者を施設に閉じ込め隔離していたという事実には驚きました。病への正しい知識と理解があればこのようにひどい扱いを受けることはなかったかもしれないと思います。私たちも一つの情報や固定観念でものを判断してはいけないと感じました。</p>

ハンセン病については小学生の頃に少し習ってそれ以来だったので、大人になった今、改めて人権と結びつけて考えることで新たな視点から理解を深めることが出来た。ハンセン病は日本書紀の頃から記述があったように、非常に長い間存在する病気であったにも関わらず、今でも差別問題が残っているのは大きな問題である。新型コロナウイルスが普及した当初も、主に学校などでコロナに感染した人が友達から避けられたり消毒を強制されたりするようコロナ差別が起こっているというのを耳にしたことがある。だが現在はそのような差別は見られなくなったように感じる。それは、コロナは既に多くの人がかかったため、自然に普通の風邪だと見なされるようになったからであると思う。それに比べ、ハンセン病はかかるとい病気があるからこそ、かかってしまった数少ない人が社会から差別されたのだと思う。今現在でも療養所が存在し、患者が収容されているというのには驚いた。一見私たちには関わりのないことに思えるが、若い頃の楽しい思い出を奪われた上に老いた今でも差別され続けるなど、自分に当てはめて考えたら許せない。同じひとつの命を持って生まれたのに一時の不運が原因で普通の生活を止められ、家族から突き放され、人生の選択肢を絞られてしまふ、死ぬまで地獄のような生活を強いられるのはあまりにも不平等である。薬で治せる時代になった今でも予算のために法律が継続されているというのも理不尽である。私たちがハンセン病について正しく理解し、相手の立場に立ち一人一人が絶対に差別行動をしないことがまずは大切である。そのためにも、ハンセン病理解についての活動を行い、過去の人権侵害を繰り返さない為にも、未来を背負う子供たちに教育の機会を設けていくこと、政府や社会に対して対策活動を働きかけていくことが私たちに可能なことである。

たまたまなのですが、本日の2限にハンセン病について授業であつたので、より詳しい話を聞くことができて学びが深まりました。根拠のない事柄により、差別を受け続けたハンセン病患者の方のことを考えるととても胸が痛みます。確かに、病気にかかれないにこしたことはないため身を守ることも必要ではありますが、事情も知らないままただただ恐怖心をあおり危険な感染症だと知らせ、本来は人権を保護する側である国が差別を合法化しており恐ろしく思います。ディズニーランドの四分の三ほどの大きさもある療養所を写真付きで見ることができてよかったのですが、家族のもとにお墓の中ですら帰れない人がいるという事実にも悲しくなりました。病気、特に感染症は誰にでもなりうるものだし、正しい知識も持たずに周りに同調し患者を責めて追い込むのはおかしいと思います。（これはコロナ禍でも感じました。）危うい情報に乗っかりイメージで物事をみるのではなく、正しい知識を持ち理解することの必要性を改めて実感しました。様々な差別の事例を紹介していただきましたが、想像以上にひどくとても苛立ちました。特に、匿名で第三者がひどい言葉をぶつけていて、どうしてそんなことが言えるのだろうかと思ったり悲しくなりました。今の時代、SNSが発達し匿名で発信がしやすくなったと思いますが、誰かに言葉を伝えるとき、もっと慎重になるべきであると思うし、顔が見えない相手になら何を言ってもいいという考えは全員が払拭すべきだと思います。同じ過ちを繰り返さないよう、人には差別意識があることを理解し、相手の気持ちに立って行動するというのを忘れずに生活していきたいです。生きている全員の人権が守られ、自分らしく生きられる世の中へと近づくことを願っています。動画も含め、貴重な講義をありがとうございました。

本日のハンセン病の問題では人権侵害の怖さについて学ぶことができました。特に、「癲予防法」が発表されてから「らい予防法」が廃止するまで、65年間も強制隔離が行われていたことにも驚きました。なぜなら、薬で治ったにも関わらず、出ることが許されなかったとお話されていたからです。治ったのであれば、退所するべきであるとともに、強制隔離する必要はなく、でていってはいけない理由がわかりません。化学療法が確立したのち、でも差別が続いたのは国のイメージや社会の安定に悪影響を及ぼす可能性があったため、情報の制限が行われていたことが原因なのではないかと私は考えます。また、亡くなった後に故郷に帰ることができず、施設の中にある納骨堂に骨が納められることはとても寂しいことで、社会の理解は不可欠なのであるのだとわかりました。桜井哲夫さんのお話がとても痛々しく、同じようなことが繰り返されることがないように情報を正しく読み取り理解するメディアリテラシーがこれからの時代にも必要であると強く感じました。まだ世界に感染者が出ていることに大変驚きました。今日の二時間目の授業、SWの理論と方法でもハンセン病について触れられていたため、より理解を深めることができました。

私は、国が、文明国なのに外国から感染症の対策が出来ていない国だと思われないという理由でハンセン病患者を隔離しようとしたことを初めて知りました。発症原因を特定し、改善に努めるのではなく、患者を閉じ込めればよいと考えた当時の国の考えに恐怖をおぼえました。治る病気になった後も国の強制隔離が続き、人権侵害があったことは絶対に忘れてはならないと感じました。

そしてハンセン病に関わらず、知らないことは知ろうとし正しい情報を収集することが重要であり、どのような人への差別や偏見も決して許されるべきではないと強く考えました。

ハンセン病が病気を理由に国が起こした人権侵害だと言う言葉がとても印象に残った。本来なら、国は人々の人権を平等に守ることが仕事であるのに、その国が侵害してしまったことに驚いた。なぜ、ハンセン病の化学療法が確立したあとも長い間隔離されていたのかという問いに対して、私が考えたのは一度埋め込まれた先入観はすぐには変わることはなく、やはり、大袈裟に言ってしまうと人は見た目が9割という言葉があるようにその外見が変化してしまうということも関係あったのではと考えた。実際には、厚生行政が関係しており、正しい病気の知識や共に歩める社会、自由と幸せをしっかりと共有していかなくてはならなかったのにそこが不十分であったことがわかった。専門家の発言力の強さも感じたので、専門家たちは責任を持って発言して欲しいと感じる。さらに、結婚と子供の話題では、今では考えられないような扱いをされ、中絶を強制され、本当に辛かったらうと感じた。目の前で自分の子どもが殺されるのを何言わずに見ているしかなかったのだととてもつらい気持ちになった。今後どんどんハンセン病が身近ではない病気になっていくと思うが、のちの世代にもこの病気があって、苦しんでいた人がいることは伝えていくべきだと考えた。その人の人生を狂わせてしまうほどの差別を受けたことは忘れてはいけないと感じる。そして、人々が正しい理解をし、知る努力をすることが大切だと感じた。

ハンセン病という病名は知っていたがどんな病気か、どんな歴史があるのかはあまりよく知らなかったので今回知ることができてよかったと思います。障がい者の扱いと同じように、よくわからないもの、自分たちにとって脅威になるといわれているものであり、存在を隠したり感染した人の数を各県で競ったりゲームのように扱っていたことがわかりました。障がい者には働けない、社会の役に立たないといっている施設に入れ、対してハンセン病患者は強制的に療養所に入れ労働や看護・介護をさせる、なんとも自分勝手であるという印象を覚えました。50年もの間療養所の問題・法律が変わらなかった理由について、そもそも差別を促進させたのは政府であるのに、差別は収まっていないですけど世間に出て暮らしていけるんですかというの理不尽で責任を何も悪くない患者に押し付けている印象を覚えましたし、そう思うのなら法律の継続より差別の取り除きを最優先すべきであったと思いました。

途中でお話の合った自分の子供の中絶を強制的に手伝わせるとするのはとても今では考えられないことで子供・母親の命を軽んじていると思いました。自分の子供を殺す手伝いをさせられていたことを思うとやりきれない。批判の手紙についてはどういうことかと聞いてみたいし迷惑とはどのことについて言っているのかと訴えたいと思ってしまいました。匿名だからといって何もわかっていないくせに好き放題言っているわけではないし、それはSNSと同じことでも昔もあまり変わっていないのだという印象を覚えました。だからこそ何もわかっていないのに批判するような、人を傷つけるような発言をしてはいけないし意識しなければいけない点であると思いました。現在の療養所は療養所というよりは町のような印象を受けました。一つ、なぜ森に囲まれているのかという点が気に入りしました。

ハンセン病の差別は政府が起こした問題だったという話を聞いてすごく驚き、悲しい気持ちになりました。私たちは、コロナウイルスを経験しているので国民が見えない病気と戦う上で、政府や専門家が言った些細なことでも鵜呑みにしてしまい、間違った意見や答えが広まってしまう恐ろしさを知っています。そうであるからこそ、政府のその行動は理解できず、政府のその行動による国民の行動は理解できない物ではないと感じました。私たちは、簡単に情報が入る世の中であつてもコロナウイルスでの差別行為が見られました。昔は、人づてに話が広まりその最中に話が変わってしまうこともあります。その状況では、差別が大量に起こってしまうのは、残念ながらいやという感じがしてしまいました。私たちは実際にその時代に生きていないから、簡単に差別などよくないと発言できたり考えたりできるかと思えます。私が一番よくないと思うのは、差別的思想に至ってしまった国民の行動ではなく、政府や専門家の意見や政策だと考えます。障がい者に向けた法律を考える前の日本も、すぐに自分達に不利益なものを排除しようとする考えに至っていました。政府の側の人間には自分の家族がもし病気にかかってしまつたり障がいを持ってしまった時に同じ政策を国民に発表することができるのか問いたいです。GHQの日本軍隊への尋問の時に、どうして戦争が起ってしまったのか日本軍に聞いた時に日本兵の全ての人は、止められる雰囲気ではなかった。空気を読んだとおもう発言をしたそうです。日本人の良いところではありますが、この性格が全ての悪い法律や行動の根源だと思います。ハンセン病の法律を考える時も、障がい者に向けた法律を考える時も、きっと数名はこの法律はおかしいと思った人がいると思います。しかし、その人は空気を読み、自分の地位を守るために黙っていたということだと思えます。今の政治家もそうですが、もうこのようなことが起こらないように、政治家の考え方や雰囲気も変えて欲しいと感じました。また、ハンセン病の療養所が今でも活動していることに驚きました。私は、ハンセン病という名前を知っていましたが、もう患者はいないと思っていたので自分は何も知らないんだなと感じました。病気の名前を知っているだけでは何も意味はないなと思いました。病気自体にも苦しんでいるのに、差別にも生活を縛られることにも苦しんでほしくないのに、現在の患者さんにはのびのびとできる範囲で人生を楽しんで欲しいなと感じます。

本日は貴重なお時間をありがとうございました。私はハンセン病について全く知識がなかったのですが、今回の講義でハンセン病について詳しく学ぶことができ、とても貴重な時間になりました。ハンセン病は4000年も前から「らい病」として存在していたということを知ってとても驚きました。また、昔は「らい病」は罰による病や汚れた病などと考えられていて、感染した人々は差別被害にあっていたということを知って胸が痛くなりました。今回の講義では、昔のハンセン病のことについてだけでなく、ハンセン病問題の歴史や国立ハンセン病資料館などについても学ぶことができました。ハンセン病に感染することにより差別されていたという事実を次の世代に語り継ぎ、ハンセン病の怖さや感染により差別をされることの恐ろしさを語り継いでいかなければならないと思いました。

今日の講義を聞き、今まではハンセン病という病気を名前くらいしか聞いたことがなかったので原因菌や症状など詳しく知れて良かったです。また、ハンセン病にかかってしまい差別やいじめで苦しんでいた人たちの歴史を知り、私は、すごくひどいなと感じました。罪があるからなどのあいまいな信憑性の低い理由だけで差別を受け、人権侵害をたくさん受けてきた患者さんの歴史を決して忘れず、今後は絶対にしないようにすることと同時にハンセン病の治療についてももっとみんなに知らせていかなければならないと思いました。

私はハンセン病について表面的な知識しかもっていなかったため、今の講義を通して歴史から現在のハンセン病について詳しく知ることができました。ハンセン病患者が隔離されていたということは知っていたのですが、結婚に制限があったことや出産ができないように施術されたというところはとても驚きました。特に、子供はホルマリン漬けされた話は心が痛みましたし、このようなことは今後起こってほしくないと感じました。また、日本では現在新たな感染者をほとんど聞きませんが、世界的にみるとまだ感染者がいることを知ったので、今後さらに療養所や感染対策が広がっていくといいなと思います。ハンセン病に限らず、差別はいけませんが、ハンセン病においては患者だけではなく、家族や回復者までもそのターゲットになってしまうのでより深刻な問題となっていると考えました。正しい知識を広げていき、差別意識を無くしていこうと思います。

わたしの通っていた小中高がハンセン病についての学習をよく行っていたので、土曜集会で映画のあんを見たのと、校外学習で国立ハンセン病博物館に行ったのを思い出した。映画のあんが特に印象に残っていた。ドキュメンタリーではなし、隔離されていた当時は再演した映画ではなく、そのあとの話だったが、こう言うことがあったと言うような文を読むより、映画で語られるほうがより心に残った。また、死んでしまった人の代わりにその人の好きな木を植えたと言う話も印象に残っている。治ることがわからなかった時、本人も周りもすごく恐ろしいものだと思う。また、周りの目により家族も一緒に過ごしたくても過ごせなかったのだろうと思った。治るようになったから大丈夫と言われても今まで散々隔離して、大事にしてきたのだからいきなり差別がなくなるのは難しいと感じた。コロナも今はよりマスクをつけなくてもいい、と言われても怖い気持ちからマスクをつけたままの人が多いし、まだ咳をしている人は白い目で見られる。もう隔離されてないからいい人にはその人の人生を奪ったのだからならないし、今も差別はあると思うし、これからも差別は残ってしまうのだろうなと思った。

ハンセン病という名前を聞いたことはあったが、どんな病気なのかやハンセン病対策によって起きた人権侵害問題については初めて知った。療養所の生活や強制隔離の状態が想像以上に酷いものであり衝撃だった。強制労働をさせられたり、一人になれる場所がなくプライベートのない生活では精神的にもまいってしまいそうだった。治療をするために入ってきたのに、病気の状況が悪化してしまうような環境だと感じた。また、国が作った間違った法律によって人権侵害が起きたこと、政府がとった行動が衝撃的だった。人権侵害にあった患者の方々の人生に回復できないほどの被害を与えたことを考えると本当に許し難い気持ちになった。私たちにできることとして、ハンセン病は遺伝病ではないこと、後遺症が残っていても病気が治っていることなど、正しい知識の共有が非常に大切だと思った。今は新規の患者数が減っている現状だが、ハンセン病患者が差別被害を受けないような理解のある社会づくりが必要だと思った。

講演ありがとうございました。ハンセン病という名前は何度か耳にしたことがあって、感染した人は差別をされていたということを知ったことがあったので感染力が強く、治らない病というイメージが強くありました。しかし、今回の講演を通してハンセン病は完治できる病で感染も人の栄養状態や衛生状態次第であり、ここまでハンセン病の問題が大きくなったのは国単位でハンセン病について正しい認識ができていなかったことが原因であったと知ることができました。化学療法が確立したのにも関わらず、50年もの間隔離されていたことや今も隔離されている人がいることが衝撃でしたが、もしコロナに関して正しい認識がされずメディアの情報が先走って信じ込まれてしまったら同じような状況になる可能性もあったのではないかと感じました。また、法律が間違っていたと裁判結果が出た後もハンセン病に関する偏見や誹謗中傷はなくならず、誹謗中傷に関してはわざわざ郵便を送っていることだったので今はもっと簡単にネットで書き込めちゃうため正しい認識が本当に大切だと思いました。コロナはまだ完全になくなってはいないのでこれを機にハンセン病について理解し、間違った行動があったときには指摘できるようにしていきたいです。

一度入ったら出られないということで人生を終えるための場所というのはとても診療所とは思えないと感じました。病気が悪いというわけではないけど患者家族は何も悪くないのに差別の対象になっていたという状況を知り驚きました。間違った知識でこんなにもひどい状況になってしまうことは今の世の中で考えるとコロナによるペーパー不足になるというデマが広がることみたいな感覚だとは思いますが、当時の情報網の少なさから報道されたら信じてしまうのも仕方ないと思いました。

私は今日の講義で見た共同生活や強制労働の様子が印象に残りました。ハンセン病は私には馴染みがなく、どのようなものかあまり知らなかったため、隔離されていたことは知っていたものの隔離された場所や療養されていたのとは違ってました。しかし、病気で麻痺などがあるにも関わらず強制労働を強いたり、小さな部屋に大人数が詰め込まれ、休むこともできないような環境であったという事実を知り驚きました。さらにそれが政府によって認められていたという事実を知り、あってはならないものだと感じました。また、入所者に寄せられた手紙が匿名でひどい言葉が綴られていたことに胸が痛くなりました。最近の病気で置き換えると、コロナウイルスにかかった患者は最初の方は「学校に来るな」や「買い物に行くな、外に出るな」という言葉をかけられていました。講師の方が言っていた通り、私もなぜ感染した人が責められなければならないのかと思います。好きで病気になったわけではなく、誰が病気になってもおかしくない状況で、そのような言葉をかけるのは間違っていると思います。自分ならその言葉をかけられてどう感じるかということに常に意識しながら、言葉を発することを心がけ、ハンセン病患者やコロナウイルス患者が負った傷が繰り返されることのないようにしていきたいです。

ハンセン病問題は昔の話かと思いましたが、およそ30年前まで根柢のない差別が続いていたと知って驚きました。遺伝病でないのに子供を持つことが禁止されていたり、病気が治った人も隔離され続けていたりしたのは長い間差別されてきた歴史が理由ではないかと思っています。人々の意識の中にある嫌悪感情はすぐには変えられないものなのだと感じました。政府や医療関係者がもっと早く正しい知識を普及するキャンペーンを行ってれば多くの人が救われたのではないかとと思います。私は小学校の授業でもハンセン病問題について習ったので、このように子供たちに差別の歴史を教育することは非常に有効だと考えます。

講演の中で、コロナウイルスの患者や医療従事者に対する差別はハンセン病問題と共通する部分があると聞いてハッとしました。たしかに、コロナウイルスが流行していた頃には連日のようにメディアが都道府県別の感染者数を報道して、都心から地方に訪れた人を差別する現象もありました。恐れるべきはウイルスであるのに差別が起きてしまったのは、講演で話されていたように多くの人が先の見えない不安を抱えていたからだだと思います。ハンセン病問題の辛い過去から、差別をなくしていくためには正しい知識の普及と歴史の学習が大切なのだと実感しました。

今回はハンセン病についてゲストスピーカーの方が詳しくお話ししてくださり、たくさんの知識を得ることができました。ハンセン病について最初は聞いたことはあるけどどのようなものかよくわからなかったので知ることができたのでよかったです。ハンセン病はらい菌という細菌の感染によって起こる感染症ということがわかりました。薬を飲めば完全に治る病気であると聞き、薬ってほんとにすごいなと思いました。昔はハンセン病の方を感染力は弱いのだから強制的に隔離する政策を行っていて、入院しているのにも関わらず施設で強制労働をさせられていて、驚きました。監禁室は死んでもらう場所という雰囲気だったと聞き、いれられた方は辛い思いをされたと思います。薬ができて治った方がいても施設にまだ出ることができず、その人たちがデモを起こすという行為は私もその立場だったら絶対にデモを起こしてるとなりました。

化学療法が確立した後も50年間強制隔離が続いた理由は、療養所を出た後に差別されるかもしれないし、住む場所とかが定まってないからどうするのということで政府このような方針をとってしまい、法律の改正が遅れたからということだということになりました。ホロマリンづけにされた胎児が300人ほどいると聞くと悲しくなりました。

ハンセン病を理由にした差別の手紙をみて、とても怖いと感じました。人権による差別被害がなくなる世の中にしていってほしいと強く考えさせられました。そして、理性を大事にして、同じ過ちを繰り返さないということが重要ということがわかりました。

ハンセン病がここまで酷い扱いをされていたことを初めて知りました。また、国が侵害した病気が存在することに驚きました。その上、化学療法が確立したあとも政府は蓋をするような対応をしたことは本当に良くなかったと思います。そこで対応が変わっていたらハンセン病患者にとっての辛い歴史が少しは違っていたのではないかと考えます。もっとも衝撃的だったのは、一度療養所に入ったら出ることができなかったこと、神経がマヒしていることを理由に療養所内で厳しい重労働を強いられていたことです。信じられない事実ばかりだったが、改めて一人一人の人権を守ることの大切さを痛感しました。今では偏見が以前よりなくなってきたとはいえ、コロナが流行し始めたときは世界的に差別的な発言や行動が広がっていたことは事実なので、自分には無関係だとは思わないで過去の人権問題にも向き合おうと思いました。

牛嶋先生

本日は公演していただきありがとうございました。ハンセン病について詳しく学ぶことができとても嬉しかったです。ハンセン病患者がどれほど辛い思いをしていたのか考えると、とても胸が苦しくなりました。また、ハンセン病患者だけでなくハンセン病患者の家族も差別を受けていたことを知りました。いじめにあったり、結婚を破棄されたり、学校や仕事に来ないように言われたりと、沢山の辛い経験をしてきたことを知り、二度とこのような状況が生まれてはならないなと思います。ハンセン病患者を見た目で判断し、近づきたくない、話したくないと思っている人が多いと思います。偏見は本当に怖いなと思いました。本講義を受けたおかげで、ハンセン病に対しての知識が増えてよかったです。もっと多くの人にハンセン病のことを知ってもらいたいなと思いました。牛嶋さんのような活動は本当に素晴らしいなと思いました。

療養所の生活の中でプライベートのない生活というのは辛いと考えた。私は、何度か入院したことがある。6人部屋であった。ベットごとにカーテンを仕切られて生活していた。しかし、生活音が聞こえたり（テレビの音は聞こえない）隣に仲が他人がいると感じたりすることがあった。その結果ストレスであった。ただでさえある程度のプライベートが確保された上での知らない人との生活は疲れたにも関わらずプライベート確保されていない生活はどれだけしんどかったのであろうか。

ハンセン病にかかっている方がホテル宿泊を拒否された話、その後匿名で誹謗中傷をしている人がいたという話を聞いて悲しくなった。人権を考えずにわざわざ時間を使って言葉で攻撃することは考えられなかった。しかし、私自身も新型コロナウイルスが流行り始めた時にコロナ感染した人知らない間に卑下していたような気がする。また、コロナワクチンを異様に避けていた。

「病氣」と定義されているもの。その人自身が起きたことない「病氣」。これを異様に避けようとする。そこから、発症した人を異様に避ける。病氣している当事者とは別である。優位劣位と捉えてしまった途端差別に変化するのではないのかと考えさせられた。

ハンセン病の治療が開発されていたにもかかわらず、誤った法律や行政の面で犠牲となってしまう命や人権が多くあったという事実には衝撃を受けました。未知の病やウイルスに人はすぐに偏見や差別をしてしまうけれど、その病氣を患ってしまった人に対して批判したり排除したりするのはなく、正しい情報を知ろうとすることから始めるべきなのだと改めて理解しました。そしてその治療だけでなくその患者さんを社会的に孤立させないように法律や行政を整えていく必要がある、人と人のつながりを特に大切にしたい被害者を出さない支援をしていく必要があるということ学びました。ハンセン病の拡大時に起きてしまった感染者に対する差別や偏見が、新型コロナウイルスの感染拡大時にも同じように起きてしまったと思います。怖さや恐れから当事者を排除しようとするこのような風潮はマスコミが正しい情報を報道すること、正しい法律で患者さんの人権を守ることなしには無くならないのではないかと感じました。

今回ハンセン病に関するお話を聞いて、患者の方々が経験した、差別的な扱いは、今後決して起きてはならないものであるということ強く感じました。特に、ハンセン病患者の方々においては、2001年にハンセン病賠償訴訟原告訴訟が起き、国がハンセン病患者の扱いのずさんさを認めたにもかかわらず、その2年後に、療養施設入所者のホテル入館を拒否したなどといった事件が起き、いつまで経っても差別意識が消えなかったということが、本当に悲しい出来事であり、そのような意識を持ってしまう者がいない世の中を作らなければならないという反省点があると思います。授業内で、人間から差別意識が完全に消えることはないということをおっしゃっていましたが、差別が無意味だということ、根拠を提示しながら説明していくことで、差別する者が減っていく、差別があってもいけないという意識が強い世の中になると思います。なので、差別が起きた時に、差別をなくすような努力をしていかなければいけないということ強く感じました。

病名は聞いたことあったけど、どんな病気で患者がどのような待遇を受けていたのかということには知らなかった。お話しくださったような状況が本当にあったのかと思うと信じられないし、特に結婚が認められていなくてそのうえ、中絶などが行われていたと知り驚いた。人としての権利とかそもそも人権が迫害されていると感じ、嫌な気持ちになった。まずは、知ることが大切だと思ったので積極的に学んでいこうと思いました。

ハンセン病という名前は知っていたが、1000年以上にわたって差別の対象となっていたことを今回初めて知ることができた。細菌からの感染ということだが、その菌自体が弱く感染することはほとんどないこと、療法が確立されているのにも関わらず対応されてこなかったという話を聞き、驚くとともに政府が植え付けたイメージがどれだけ強かったのかを思い知らされた。これはハンセン病だけではなく、障がいを持つ方などにも当てはまると考えた。私の祖母の話だと、昔は少しでも障がいなどを持っているとならぬと家族や自ら倉庫のようなところに閉じこもって一生を過ごしたと言っていた。社会がそれを黙認していたこともそうだが、家族また自らもその偏見に飲み込まれ、自由を手にならなかった現状は今も少なからず残っていると思った。社会全体が一気に変化することは難しいが、私たちがのようにこの話を聞いて病気の正しい知識だったり、偏見を持たずに生活することで、どんな特性を持った人でも生きやすい社会を構築していきたいと切に思った。

今日の講義の中で特に印象に残っていることは、ハンセン病患者や回復者、その家族への差別、人権侵害である。ハンセン病は感染力が低いにもかかわらず、外観の特徴などから、偏見や差別の対象となった。療養所の生活は、入ったら出られない、医療や食事が不十分、など、ハンセン病患者を人間として扱われていないようなものであった。人は bodies の知れないものに恐怖を抱き、遠ざけようとする傾向があるため、このような状況になってしまったのではないかと。コロナが始めた頃にも患者や医療従事者に対する偏見や差別があった。このような偏見や差別を防ぐために、理解しようとする意識が大切なのではないか。これからは未知のウイルスや病気が出てくるかもしれない。そんなときに偏見で判断するのではなく、確かな情報を集めて正しく付き合っていきたい。

今の時代を生きる私は、療養所とよくとも清潔で治療のための設備がしっかりと整っており、療養者がリラックスして生活できるよう配慮された空間を想像する。しかし、ハンセン病の療養所の生活は、不十分な医療と食事で仕事を強制されるうえに、子どもを産むことやプライベートの空間が許されないという人権侵害のような生活であったとしりともショックを受けた。1度つくられた差別であったり偏見は、それを覆すことが難しい。しかし、それを受けた人は一生その傷を負わなければならない。そのことを忘れてはいけず、偏見や差別を許してはいけないと強く思った。しかし、人間は誰しも差別意識をもってしまうものであり、理性でそれを阻止することが大切だという言葉も聞いて、差別や偏見をもっている人を頭ごなしに批判するのではなく理性に基づいた行動ができるように導くことが差別や偏見をなくすのに効果的なのではないかと考えた。

今までハンセン病という病名は知っていましたが、どのような症状で、また社会の中でどのように位置付けられていたのかは全く知りませんでした。今日の公演を聞いて、ハンセン病患者の皆さんが療養所に収容されて、強制労働を強いられていたという事実には衝撃を受けました。病気で苦しむ人々に対して、さらに悪化させるような生活をさせる療養所、それを容認する政府、社会に怒りを覚えました。立派な人権侵害であり、これが実際に患者が運動を起こすまで問題とされていなかったことが信じられません。人間は臆病な生き物で、理解が足りない物事を恐れ攻撃をしてしまいがちです。自分を守るという面では悪いことではありませんが、攻撃をすることは決して許されたいと思います。まずはお互いによく理解すること、一人ひとりが相手の気持ちを考えて何がより大事だと思いました。

ハンセン病の原因が分からなかったために悪いことをした人が感染しているのだと思われて差別されてしまうのが悲しい。人権を国が主導して侵害してしまうことがあるというのが驚きだった。そうになったら患者が国や、国のプロパガンダに影響された国民に対して意見を主張することは難しいと思った。

私は今までハンセン病がどんな病気なのかよく知りませんでした。しかし、今回の講義を聞いてハンセン病について知れただけでなく、ハンセン病患者やその家族が受けた酷い人権侵害などのハンセン病問題があったことまで知り、そんなことがあったなんて思いもしなかったとても驚きました。ハンセン病に罹ってしまった人も、罹りたくて罹ってわけではないのに、罹ってしまっただけで結婚が許されなかったり、外出も自由にできなかったり他の人から差別されるのはおかしいと思いました。この問題を解決するために、もっと日本社会全体にハンセン病問題についての現状を伝え、人々にハンセン病についての正しい知識を持たせた上で、ひとりひとりがハンセン病患者について正しく関わるようになる必要があると思いました。

ハンセン病についてはこれまでの他の授業でも触れる機会があったが、今回は法律やハンセン病患者が受けた差別の具体例などを聞いてハンセン病についてより深く知ることができたと思う。例えばホテルの宿泊を拒否されたり子供を作ることが許されなかったりと健康であっても差別される状況を知った。

入所者に寄せられた手紙の文も実際に見て、「人間ではない」や「死ぬ」という過激な言葉やそれを入所者と何の関係もない第三者が匿名で送っていることに驚きとショックを感じた。

またが治療薬出てからも強制隔離が行われた理由として「簡単に社会のステレオタイプは変わるものではないから」と発表してくれた人がいたが自分もそうだと思っていた。しかし療養所の処遇改善のために法律を継続させる必要から隔離が続いたことやこの間違った法律によって人権侵害や差別が続いたということを知ってびっくりした。

そしてハンセン病患者差別の歴史として、本来は人権を守るべき国がハンセン病患者に対して人権侵害をしてしまったことが一番の問題だと感じた。

本日はお忙しい中貴重なご講話をありがとうございました。本日の授業を通して、私はハンセン病による人権侵害問題は差別や偏見を生んだ国民だけでなく国家にも責任があると考えました。私は何度かハンセン病に関する講義を受けたことがあったので、ハンセン病がどんな病気でハンセン病患者がものすごい差別や偏見を受けたということはざっと理解していました。私も最初は、ハンセン病＝患者に触れたら、同じ空間にいたら映ってしまうのではないかと、一生治らない病気だかと思ってました。しかし、講義を聞くともむしろそんなことはなくて、私自身も知らぬ間に社会の差別や偏見に染まってしまっていると自覚しました。私のようにハンセン病だけでなく全ての差別や偏見は、自分が何か嫌なことをされたとか実体験があったとか関係なしに生まれてしまうものです。だから、ハンセン病も含めての差別や偏見による人権侵害問題は、確かに差別や偏見を持ってしまふ市民も悪いかもしれないけど、国家をまとめる政府の側にも責任があり、政府がしっかりとした対策を講じるべきであると思いました。また、コロナ下でもそうですが、人は何か怖いこと不安なことがあるとすぐに相手を排除しがちで、仮に自分に排除したいという思いがなくても周りに同調して排除しがちです。このことを含め、病気による人権侵害問題を減らしていくためには、真っ先に相手を排除して、周囲の信憑性のない情報に同調するのはなく、相手の気持ちを考えて正しい情報を見極めて、自分は自分と相手の意見をすぐに信用しない必要があると思いました。

ハンセン病という病気は知ってはいましたが、こんなにも残酷な人権問題に発展していた過去があったことを初めて知りました。印象に残ったのは療養所の存在です。一度入ったら出られない、家族と一生会えないという空間に閉じ込められる上にその療養所内でも不十分な医療や食事でプライベートのない生活というは全てがストレスであると思います。私にはそのつらさを全て理解することはできませんが、このような過去があったことを知ってもらうことはできます。実際に私が今日の講義で知ったようにこの事実を知ることの意味があると思います。またコロナウイルスが流行っている頃を思い出すと先生方が感染した生徒の名前をふせていて人権の面からの対策であったと感じます。また実際に私の周りが感染したとき、自分のせいで部活動が休止になったらどうしよう。ととても不安を感じていました。そしてコロナのときも人権問題が起きていました。ハンセン病の時とは環境や考え方が変わっていると思いますが人権問題が起きているという点では同じです。相手の気持ちを思いやるということが難しくなる状況であるとは思いますが、そのような人々を責めるという行為は決してしてはいけないうことだと思います。少しでも多くの人が人権侵害をうけることのないような社会になってほしいと思います。

未知のウイルスや病気に対する恐怖、不安によって行われた政策や処置において、人権が侵害され、将来の選択肢が奪われ、と治療以外の苦しさも味わわなくてはならなかった事実があった事をちゃんとリアルな歴史として知ることができた。国民を守ろうと、障害者を保護しようとした時代と同じ頃に、感染症患者に対しては、継続的な強制隔離が行われていて、当時は拾われなかった声もあったのだと悲しくなった。偏見の目や患者に向けられるイメージなど、簡単には変わっていかないほど歴史が長かった分、1996年までと長い間違った政策がされていた事実は、現在のコロナの政策にも学ぶことができる部分であると思う。実際政策の対応も、宣言も、何度も変更されて、その時に適した処置ができたとは思う。

国による間違った方針によるハンセン病患者に対する人権侵害があることは前から中学校、高校の授業で聞いたことがあるので知ってはいたが、今日より深く知ることができて良かった。差別や偏見をなくすためにはまず知ることが大切であると思う。私はもともとハンセン病はそんなにうつるものではないことを知っていたので差別意識はなかったがそれを知らない人はハンセン病は特に見た目で見分けやすいので見た目で見分けやすい病気が差別されやすい傾向があると思うのでハンセン病も同様にそうであったのかなと考えた。これは病気だけではなく障害にもつながることであると思う。もののけ姫にもハンセン病であろう人が描かれていることも知っていた。昔からハンセン病は隔離されて社会から閉ざされて生きていたことがアニメにも描かれていることは少し悲しいと思う。色々なことに共通していることだが差別のない世の中になれるように私たち一人ひとりが差別がある現状とその原因となっている理由、そのものについて詳しく知ることが大切であると思う。

ハンセン病という名前は聞いたことがあったのですが、そのハンセン病によって人権侵害が起きていたことなどは初めて知りました。ハンセン病患者の療養所での暮らしをきいて、人としての生活が確保されていないことを知り、ハンセン病にかかったというだけで、人としての暮らしができなくなってしまった過去があったことは、非常に悲しい過去だと思えますし、今の自分たちはその過去としっかりと向き合う必要があると思いました。また、「病気を治すところではなく、そこで死んでもらうための場所」「死んだ後も、療養所から出ることができない」という言葉が印象的で、ハンセン病患者の方々が療養所に縛られてきたのだなということを実感しました。

桜井さんのお話の中でも、真理子さんのお話を聞いて、改めて命の重さをひとりひとりが考えなければいけないと思いました。自分の子供がホルマリン漬けにされてしまうことが、どんな気持ちなのか容易に想像できるのに、どうしてこのようなことが起きてしまったのか、このようなことを繰り返さないためにも、今を生きている私たちは考えなければいけないと思いました。

また、家族に与える影響も大きいことはハンセン病患者の方にとってはより辛いことだったのかなと思いました。自分だけではなく、大切な家族まで差別を受けることになってしまう状況は、自分が差別されることよりも辛く感じる方もいらっしゃると思います。

こういった、ハンセン病患者の方の人権問題を学び、絶対にまた繰り返してはいけなうと思いましたが、そうならないためにも、一人一人が当事者意識を持って、その問題と向き合うことが大切だと感じました。

人は周りと比べて特異なものに対して嫌悪し、突き放すのはいつの時代も変わらないのだなと思った。人間らしく生活する権利をもらえない状況であることを一人ひとりが想像して自分ごとのように思えるがしっかりと理解するためには重要であると思った。

ハンセン病という病気についてなんとなく聞いたことがありましたが無類運動など日本政府そのものがハンセン病患者の人に対してここまで酷い対応をとっていたとは知りませんでした。ハンセン病患者の方が人として生きられない、人権を剥奪されるような生活を送らされていたこと、そして治療法が確立しても尚何十年も迫害されていたことなど今まで聞いたこともない衝撃的な話をたくさん伺いました。自分の子どもの中絶手術を手伝わされたり、死を待つだけの監禁部屋に閉じ込められたりなど本当に同じ人間同士で行ったことなのかとショックを受けましたがこれがハンセン病患者の方々が体験した"人権剥奪"なのだと気付かされました。

真理子さんが、桜井さんの腕の中で亡くなる様子を描いた詩が読み上げられたとき、涙が自然と流れてきた。なぜ、真理子さんは亡くならなければならなかったのか。この問いかけが胸にずしんとくる感覚を瞬間的に覚えた。正しい病気の理解、共生する術の探索、何よりも人間としての尊厳を尊重し合うこと、その全てを放棄して、かけがえのない命が生きる権利を奪ったのは国だったと学んだ。ハンセン病問題は国による人権侵害問題の暗い過去のことだとはじめて知り、国内のハンセン病患者に対する処遇の悲惨な歴史を知ることでは私たちがあらゆる人権問題に真っ向から向き合うことはできないと感じた。ハンセン病患者とその周囲の人間が、彼らによって人間の醜い排除の心理や責任のない発言や歩み寄ろうとしない一方的な姿勢と闘い一歩ずつ踏みしめられてきた歴史のうえに、全ての人間が人間らしく自由に幸せに生きていく権利が守られているのだということを知ることができた。真理子さんは、桜井さんの詩の中で、誰よりも永く生き続けている。私は、そう確信した。

ハンセン病のことは中学や高校でも軽く話を聞いたことがあり、その時は偏見の怖さを感じて昔は怖い時代だったのだなと思っていた。しかし今日はコロナのことと照らしながらお話を聞いて現代も似たようなことが起こっているということが分かり、歴史から得た反省を繰り返さないことの難しさを感じた。その中で現代との違いは公的機関の立場であり、ハンセン病が流行していた時代は患者には司法も及ばなかったということにはかなり衝撃を受けた。コロナ禍においても隔離は行われたが、

本日の講義ではハンセン病についての歴史や知識について詳しく学ぶことができ、現代のコロナ禍を重なる点がいづつかあり、勉強になった。ハンセン病は新型コロナウイルスと同様飛沫感染から感染し日本で広く流行してしまった恐ろしい病原体であった。資料館にハンセン病が及ぼした影響を資料に残すことで、今後またそのような状況になった時に対処できると思う。また、ハンセン病により感染者への差別が起きてしまふ多くの人が苦しんだと思う。そのようなことは今後起こらせないようにするべきであると思う。またハンセン病やコロナウイルスなどの病原体が今後現れないことを願う。

ハンセン病患者からしたら受けている迫害や差別は本当に辛いものだと思う。しかし、患者ではない人からしたら怖いと思うのも今の認識だと事実だと思う。だからこそ、国全体としてのハンセン病に対する認識を変えていく必要があると感じた。

ハンセン病を患った人は、元の生活に戻れないという話がとても印象に残っている。元通りの生活、家族との関係などが崩れてしまいこれまでの生活とは一変してしまうという話を聞いて、心が痛くなった。また、私たちは少なからず偏見の目、差別の目を持っているという話で、差別の目を持っていることは仕方ないのだと言うことを聞いて納得した。それを理解した上で、お互いが歩み寄り広い心で受け入れ合うことが大切だと思った。ハンセン病とは聞いたことがあったけれど、具体的にどんな病気とどんな症状があるのかまでは知らなかったし、それで苦しんでいる人がたくさんいるということも知らなかったの、今回知ることができてよかった。他人を広い心で受け入れられる大人でありたいと思う。

今日のお話はとても衝撃的なものでした。療養所の劣悪な生活環境や、強制労働。また、子供を作らせないための断種手術や中絶手術の強制は、明らかに基本的な人権を侵害しています。基本的な人権どころか、そもそも人間として認識されていないようでした。ハンセン病療養所の人がホテルへの入居を拒否された事件への誹謗中傷でも明確に「人間のまねをするな」や「死ね」など必要以上に強い言葉を使い、存在自体を非難しているのにも辛かったです。また、治療法も確立され、完治すれば移ることがないにも関わらず、イメージだけで偏見をもたれ、酷い差別をされてしまったのは、国が間違いを認めた後も対応が不十分であった証拠だと思います。誰でも罹患する可能性があり、いつ患者になるかわからないことを考えれば、このような誹謗中傷や差別行為はできないと思います。しかし、現在になってもコロナウイルスの感染と同じようなことが起きてしまいました。差別感情が生まれてしまうことは自然なことかもしれませんが、その感情に対して自ら考え、冷静になることが重要だと感じました。

私は今回の授業を受けて初めてすっかりとハンセン病問題について学び、その残酷さや深刻さを思い知り、怒りやもどかさのような気持ちが生まれたとともに、ハンセン病問題の解決に少しでも貢献したいと思うようになった。ここでは具体的にどのような点から残酷さを感じたのか、そして今回の学びを活かし今後自分が何を意識してどう生活していくのかという2点について分けて記そうと思う。

まず、私はハンセン病患者が受けていた人権差別に加え、国も法律で差別に加担してしまったという点から、この問題の酷さや残酷さを実感した。ハンセン病患者が入所する療養所は、生活環境が悪いうえ、重症化リスクも顧みず仕事もさせられ、そして一度入ったら病気が治ったとしても二度と外に出られない、ハンセン病患者を隔離しそこで死んでもらうための施設だった。また、ハンセン病を治せる薬ができ、治る患者が出てきた後も、療養所から出られないのは変わらなかったという。これらを受け私は、ハンセン病患者の待遇があまりにも酷すぎると思い、怒りを覚えた。そもそも療養所に行くのもハンセン病患者を社会から隔離させるのが目的で、療養所に行ったところで療養させてくれるわけでもなく、むしろ悪化するケースもあるうえ、家族とも再会することなく死ななければならぬなんて残酷すぎる。ハンセン病患者が何か悪いことをしたとしても言うのか！という気持ちになった。また、病気が治ったとしても療養所を出ることが許されないような政策になったのは、いきなり社会に出ても暮らしていけないではないか、療養所の質を改善すべきといった意見や、まだ世間には差別や偏見が根付いているからというような理由があったからだとして、私は問題の根本的な解決をしようとしなかった政府に対して疑問と不信感を抱いた。ノーマライゼーションの考え方ははかばかしているとも考えた。この時に、政府を含めたマジョリティ側が全くハンセン病患者、つまりマイノリティ側のことを知って理解しようとしなかったからこの問題が今も解決していないのではないのか。

では今も解決していないこのハンセン病問題を少しでも改善していくために、私にできることはないのか。今後自分が何を意識してどう生活していくのかを最後に記す。私は今回の授業でハンセン病問題のことを学び、まずは問題を知って正しく理解することが解決への第一歩になるのではないかと考えた。だから、今回自分が学んだことを周りの人に伝え、1人で多くの人に知ってもらうようにしたいと思う。また、ハンセン病に限らず、全てのことに対し色眼鏡で物事を見ずに物事の本質や背景を見る意識や、ノーマライゼーションの考え方をさらに強く持つ所存だ。そしていつ何時も何事に対しても愛を持って生きていく決意だ。

昨日はお足元の悪い中、お越しいただきありがとうございました。スライドがシンプルでイラストが多く、イメージが湧きやすかったです。なぜハンセン病による差別が拡大したのか、気になりました。このイメージがわかりません。例えば、この件はコロナウイルス感染者が「気持ち悪い」とされる差別と類似しています。私を知る限りでは、コロナウイルスの感染後に、そうしたことは起きていないように感じます。さらに医療従事者の件は別ですが、コロナウイルスにかかったからといって、家族まで被害が及ぶとは考えられません。被害が拡大・長期化した理由としては、正体不明なハンセン病への知識不足により、自己防衛機能が働いたからだと考えました。

また、医師が偏見を拡大させたという事実にも驚きました。専門家が有する専門性ゆえに、良い意味と悪い意味のいずれにせよ、影響が広がりやすいといえます。私が将来就職した際は、誤った思い込みによって、誰かを傷つけないように注意していこうと思います。

本講義をきっかけに、ハンセン病の基本的な知識を習得して、誤解による偏見を抱く恐れが無くなりました。正直に申しますと、ハンセン病については名前のみ理解している状況でした。ハンセン病とは公害病のようなものかと思っていました。今後、ハンセン病のように、正体が曖昧な病気由来の偏見を減らすため、さらにハンセン病への理解を深めたいです。

質問です。なぜ現在でも療養所が残っているのでしょうか。薬の服用のみで治療が完了するならば、療養所に入所せず、治療ができると思えます。そうした中で療養所に残る方がいらっしゃる理由を伺いたいです。お時間がございましたら、ご回答お願い致します。

講義の中で、なぜ、化学療法が確立した後も50年間、強制隔離が続けられたのかを考えたときに、戦前の偏った考え方を約50年間もずっと引きずっていたと考えた。また、世代が変わるのに50年かかってしまったからという意見もあった。私は、ハンセン病は過去の話であると思っていたが、現在も家から出られない人がいると知り、驚いた。このハンセン病問題から国も過ちを犯すということを理解し、我々は本当に法律が正しいか常に監視していかなければならないと思った。

当事者の声は、よりリアルなハンセン病の実態を理解させてくれました。国に人権を奪われ、人として生きることを認められなかった患者たちは、法が廃止された今もお苦しんでいます。それは、何が正しいのか、恐怖と憶測で真実を理解できなかった国民の責任でもあります。

最近もホテル宿泊拒否事件が起こったように、人々は差別する歴史を積み重ねています。これを改善するために私たちにできることは、ハンセン病等の患者に対する差別を法で禁止することだと考えます。法で禁止すればハンセン病の認知度も上がり、かつ尊厳を守られるような環境になると推測します。

ハンセン病患者が社会的差別を受けていたことは映画「もののけ姫」を通じて知っていたが、あまりにも実情が悲惨で耳をふさぎたくなるものばかりであった。法的に完全にアウトな事柄にも関わらず、それがまかり通ってしまうほど人々の心の無自覚の差別がエスカレートしていることが衝撃的だった。

私自身、強皮症という難病指定の疾患を患っており皮膚の変色やくぼみ、筋肉の硬直が全身に見られる。発症当時、家族から「病気も個性だ」と言われ受け入れようとしてきたが、いまだに人前で症状が出ている部分を露出することには抵抗がある。海外にはアトピー等の皮膚の変色を個性として発信しているインフルエンサーも多くいる。励まされることもあるが、正直なところ現代日本では「外見主義」的価値観はまだ色濃く残っていると感じる。実際、傷ついたことも多々ある。

そんな私が肌で感じている違和感と今回の講義から、私なりの打開策を考えてみた。自分自身が、積極的に病気のことを発信することだ。すこし大きなハードルにはなるが、自分の個性として受け入れ、世の中に発信し、私のように悩んでいるティーン世代にエールを送ることが出来るような機会になるのではないかと期待している。

牛嶋さんが、差別は人間の本能的な防衛反応で仕方ないことではあるが、それを理性で捉え相手の立場になってかんがえることが出来るのが人間である、と講義の最後におっしゃっていた。心に眠っている「当たり前」の感覚を相対化し、当事者と一緒に考える機会を作ることが出来れば、さまざまな【個性】が輝く世の中へ一歩前進することが出来るのではないだろうか考える。

これまで私は、ハンセン病の名前と体の一部が変形してしまう病気というところしか知りませんでした。今回お話を伺って、ハンセン病について知り、学んだことが二つあります。

一つ目は、情報を鵜呑みにしてはいけないということです。情報操作によって人権侵害が起きてしまったということは、それだけ一つの情報を信じてしまう人が多かったということだと思います。確かに手が変形してしまっている患者さんを見て「怖い」と思うってしまうことはあるかも知れませんが、だからといって差別をしたり強制的に隔離したりしていい理由にはなりません。SNSの発展により現在は昔よりも情報が得やすくなっている反面、本当かどうか確認がない情報も多く見られます。自分で情報を得て、本当に正しいことなのかしっかりと考えて判断していけるようになっていきたいです。

二つ目は、過去の出来事を過去のこととして簡単に片付けてはいけないということです。ハンセン病は現在の日本では患者数が減少していますが、世界にはまだ多くの患者さんがいます。また、コロナウイルスのように別の感染症が流行する可能性もあります。講師の方もおっしゃっていたように、一人一人がハンセン病問題を正しく理解することで自分の中にある差別意識を見直し、相手の気持ちに立つことができるようになると思います。もう二度と同じ過ちを繰り返さないようにするために、まずは自分がこの問題についてより深く知っていきたくて考えました。

本日はご講義いただきありがとうございます。

私はこれまで「ハンセン病」という言葉やそれが感染症の一種だということは知っていたのですが、ハンセン病が現代まで根強く残る「人権侵害問題」だという認識はなかったため、今回このような新しい視点を得られる機会をいただいたことは、本当に貴重であったと感じます。

今回のお話の中で印象に残ったことは、「患者は『病氣』じゃなくて『人』だ」という先生のお言葉です。個人的な話になってしまうのですが、私はコロナが世界中で蔓延し始めた頃ちょうど海外に滞在しており、現地で「コロナ」と叫ばれたりアジア人に対する人種差別を経験しました。そのため、今回上記の先生のお言葉を聞いて、やはり人間はいつの時代でも未知で姿が見えない恐怖を目の前にすると、その不安を少しでも和らげるために相手を攻撃することがあるのだと改めて考えさせられました。それと同時に、ハンセン病をはじめとした感染症、人権侵害問題についての歴史を学び、一人でも多くの人が正しい知識や理解を身に着けることで、同様の被害にあう方が今後いなくなればよいと思いました。また、たとえ相手どのような状態であれ、目の前にいるその相手は自分と同じ人間なのだとすることを心に留めながら人と接していこうと考えました。

私は今までハンセン病のことはとても恐ろしい病氣だと思っていましたが、ハンセン病は非常に弱い菌で、万が一感染しても現代では早期発見して適切に治療すれば治る病氣だということを知ってホッとしました。今回の授業でハンセン病の症状や感染原因などを知り、昔は今よりも栄養状態が良くなかったこともあり、昔は本当に恐ろしい病氣だと認識されていたのだろうなと思いました。それでもハンセン病にかかった人が強制収容・強制労働させられていたことには本当に心が痛みました。

ハンセン病という病は聞いたことがあったが、詳しくしなかったで、この授業を機にされたことは非常によかったと思う。ハンセン病による差別が広がっていた世間では、ハンセン病の誤った情報の流出があったため、大きな差別が起こったと知った。この時流は今の日本でも同じことが起こっていると考えた。これからの時代、変化する時代と言われているため、この情報の取舍選択が生きるためには必要だと考えた。

講義では、ハンセン病患者の差別などについても触れられていましたが、こうした人々が人権を獲得する為に活動してきたことは、現代の風潮である差別廃止、多様性、平等という考え方に繋がってきており、一人一人の声の結集が大きな力へと繋がってきた良い例だと思いました。これから先、全ての人がより幸福度の高い生活ができるようにより良い考え方が普及していくべきだと思います。

ハンセン病について、私たちが知らなければならないことはたくさんあると思った。

ハンセン病患者の方で亡くなってからもご家族のところに帰ることが出来ない方がいるということはとても悲しいことだと思った。

国は国民を守る立場にあるはずなのに、国のせいでも苦しめられた人が大勢いるというのはおかしいと思う。

恥ずかしながら、ハンセン病についてこの授業を受けるまではあまりよく知らなかった。そのためハンセン病患者がこのような酷い差別を受けていることを知り、衝撃を受けた。差別が、国の間違った政策により起こることを知り、幼い頃から受ける教育による思い込みの力は根強く、そのため制度が新しくなっても、差別意識による誹謗中傷は消えないのだろうと考えた。ハンセン病の療養所はまるで監獄だと感じた。病氣にかかっただけで本人は何も悪くないのに関わらず、最悪な環境の中に1度入ったら出られないという終身刑のような扱いを受けるのは、不当な差別である。そして療養所の中の患者に人権がなかったことも恐ろしい。子どもを産むことが許されなかったというエピソードは本当に心が痛んだ。このことから、人間扱いをされていなかったことがよくわかった。何よりも、「らい予防法」が1996年に廃止されたということで、つい最近まで療養所の中に患者が監禁されていたというのが衝撃的であった。このような差別は、間違った知識を皆が信じたことで広がってしまった。このことから、自分の中の常識は常に疑い、政府やメディアと情報を鵜呑みにしないで生きていく必要性を学んだ。

治療薬が開発されてからも行政が理由をつけて隔離していたことや療養所内では法律すら守られないことに驚いた。療養所にいた方達が高齢化してきている今こそ、ハンセン病の歴史を後世に伝えていくことが非常に重要だと思う。戦後、ハンセン病患者が改善を訴えても、メディアに取り上げられなかったこともあり中々改善されなかったと聞いたが、今はネットが発達して、マイノリティの声も聞こえるようになったので、小さな声にも耳を傾けていきたいと思った。

ハンセン病の療養所が人生を終えるための場所であったということがとても印象に残った。療養することが目的であるはずの療養所が、このようなくらい目的となっていたことを知った。そしてここは十分な医療や食事やプライベート、仕事がないだけでなく、人々の人権までもがない場所であったかのように感じた。そして差別被害は患者本人だけでなく、その家族にも及んでいた。ハンセン病患者が家族の中にいるからという理由で差別を受けていたことでも無理不届きであると感じた。その被害を受けているのは、ハンセン病患者の家族だけではなく、障害者の家族や殺人犯の家族など、自分では要因によりいじめなどの差別被害を被ることがある。日本の社会には、今も昔も、悪くもない人を悪者に仕立て上げ、その周囲の人をも悪者とし、自分は、マジョリティ側で正統派を装っている人が多いように感じた。

今回の授業を受けるまでは、ハンセン病を名前だけしか知らず、具体的にどんな症状なのかなどを全く知りませんでした。今は治る病氣なのに昔は、無い運動などによって偏見や差別があったことが1番残念だなと思いました。その偏見や差別を排除するためにハンセン病資料館があると聞きハンセン病資料館は、ハンセン病の方達だけでなく自分たちのような何も知らない人間に伝えるためにも必要だと感じました。また、もっと早く治療法があれば後遺症もなく過ごせたのと思えば悔しいだろうなと思いました。今回の授業で日本書紀にも書かれている昔から存在していたらい菌によって起こるハンセン病について学べてよかったです。私にできることは少ないと思いますが、少しでも自分にできることを考えて行動したいなと思いました。

私自身がハンセン病についてあまり詳しくなくて、この講義を受ける前はハンセン病の人が差別を受けているのが大きな問題になっていたということしか知らなかった。またこれを学んだのも、学校で学ぶ日本の歴史の中のハンセン病の差別というカテゴリーで、しっかりとハンセン病そのものについて学ぶことは今回が初めてだった。そのため、ハンセン病の差別の話を知り、その壮絶さにとても驚いた。ハンセン病を患った人は自分が想像していたよりひどい対応を受けていた。特に印象的だったのはハンセン病を患った方の療養所の中での生活だった。療養所といったら病氣を治すために、患者は治療しながら安静にしなければならない場所であるのが普通だ。しかしハンセン病の療養所は、患者同士で看病し、患者は強制労働させられていたというのがわかって、ハンセン病になるのは悪いことではないのにまるで刑務所みたいに、悪いことをして更生するための場所のようだと感じた。またプライベートがない生活や子供を産むことを許されないというのを聞いて、ハンセン病の方は何を楽しみに生きていたのだろうかと考えた。私だったらその生活に耐えられないのではないかと考えた。またハンセン病の人が差別されてしまう大きな原因として見た目ではないかと考えた。ハンセン病の方の症状の写真を見てとても痛ましかったり少しこわいと感じてしまった。例えば病氣が治ったとしても、跡が残ってしまったりすることで、近寄ったら病氣が移されると感じてしまい、差別してしまう人が多いのではないかと考えた。しかしハンセン病は人に移ることが少なく、実際とは違う情報により差別されていたのではないかと。やはり正しい情報を知ってもらうことが大切であると実感した。

今回の講義で初めてハンセン病について詳しく学びました。菌によって起こる感染症であることは知っていたが飛沫や咳などでも感染するという恐ろしい一面があることを学ぶことが出来た。そして近代以降日本の間違った対策により多くの人権被害があることを知りました。一見療養所に入ることが出来れば治って出てこられる場所だと私は想像していましたがその中は非常に悲惨で、不十分な医療と食事、子供を産むことすらできない患者を閉じ込めるための監禁室と化しており「人生を終えるための場所」とされていることも学びました。最後に患者のみならずその家族までもがいじめや仕事を失ったりと様々な差別があることも学びました。現在では治療薬もあるため入院せずに完治できるまで医療は進歩したので良かったと思います。きつい症状を理解し、寄り添うことのできる社会全体を目指すことが重要であると私は考えました。

講義をしていただきありがとうございます。貴重なお話を聞くことができました。

ハンセン病の問題は、人権侵害問題に繋がるという内容が、特に印象的でした。現在、ハンセン病にかかる人は数名程度いるが、現在は治療薬があり完治可能の上、感染力が低いという事が分かりました。このような正しい知識を知ろうと行動する事が、偏見差別による人権侵害問題を生まない方法の一つだと感じました。

今回の講義ではよりハンセン病患者のことに知ることができた気がする。ハンセン病患者に向けられる差別の眼は今も残ってしまっているということが一番問題でありすぐに改善しなければいけないとわかった。このハンセン病患者への差別をなくしていくために必要なことは多くある。まずは、ハンセン病の正しい知識を持つことだ。間違った知識でバイアスを生んでしまい差別に発展する。知識を持って変わっていくと考えた。そして二つ目に、ハンセン病の方と接する機会を作ることだ。経験や直接的に実感することが自分の中の心を一歩動かせると思う。なかなかむずかき意志と思うがそのような場を作ること大切はずだ。

ハンセン病は、患者が過去に差別されてたものというイメージが強く、具体的にどのような病氣なのかは知らなかった。実際、現代では完治することが可能である事も知らなかった。

この問題はただの病氣の問題に留まらず、人権問題として未来へと伝えていかなければならない。そして同じような事を繰り返してはならないと思った。

大幅な電車遅延の影響で少し遅れて参加したため、直接教室に向かい講義を受けました。

精神疾患や精神疾患とハンセン病とで、講義を受ける前では全く別の問題で無関係な物であると私は考えていたが、ハンセン病主軸の過去の歴史を学ぶことで学びがありました。また、隔離療養場で生活する事は新たな疾患を生み出しうる要因であると感じました。また、発病者自体は非常に少ないものの、衛生環境の悪い国々では現在も存在する事を初めて知りました。